

地理学史上の明末

－ 衙門の地図と山水図式地図の系譜－

大澤顯浩

はじめに

地理的情報には大きく分けて、中華の地にはいくつ省があるかとか、浙江の省都は杭州であるというような地理常識や、科挙の参考書にみられる経書の解釈に必要とされる歴史地理的な知識、いわば個人的な必要を満たすもの他に、地方衙門で編纂保存される内部の公的な記録資料に属するものが存在する。

初めの地理常識は私的な領域で必要とされたものということができ、現在では初等教育の段階で身に付けるものとされている。しかし、中国の啓蒙教育の段階で地理常識が教えられるようになったのはどの時期まで遡れるかは定かではないが、それほど古い時代のこととは思われない。

中国はさすがに歴史を重視する文化というべきであろうか、南宋の王応麟(1223 - 1296)の撰といわれる『三字経』に「自義農、至黄帝」という三皇から南宋までの歴史は略述している。それに対してごく簡単な地理常識の記載も見られない。南宋末・元初という時代を考えれば逆に中華や禹域というようなことばを使い難かったのかもしれない。しかし『蒙求』や『小学』が人物故事を取り上げるように、啓蒙教育ではまず人物故事への親和性が高かったようで、地理知識については意識の外にあったといえよう。

宋代は地図が発達した時代であったことは夙に知られていて、幾つかの石刻地図や版刻された歴史地図が現存する。¹⁾ことに石刻地図は各地の学校などに置かれることがあり、一種の民族主義教育の材料として刻まれたものもある。とすれば啓蒙教育の段階でも触れて然るべきもののように思われるが実際にはそうでもなかったらしい。匹夫匹婦は民族意識の担い手としては見なされな

かったようである。

洪武辛亥の木記がある『魁本對相四言雜字』も日常生活の各場面で必要とする用具や語彙を図示するものだが地理の記載はない。初等教育にはやや高級な「積義經書」を謳った一部の明末の雑字には上下二層に分かった上段に各府州県の一覧を記すようなものも現れたが、²⁾蕭良有(1550 - 1602)は明末の地理書、盧奇『職方攷鏡』に序を寄せて、当時の世間で流行している文章でも山川や風俗・税額・歴史沿革などの記載については当を得ていないと批判したが、³⁾蕭良有自身の編纂した啓蒙書『龍文鞭影』などもやはり人物故事を中心としたものである。程登吉『幼学瓊林』に至って南北両京と各省を織り込んだ対句表現が記されている。⁴⁾どうやら識字教育や道徳を重視する中で、地理や地誌は初等教育の枠外に置かれたかのようなようである。

極端な話、清末まで同様の状況は続いていたようで、康有為『日本書目志』巻四、図史門の序では、中国では世界の境界、情勢や地誌を教えないので、「野人山地」や「滇界土司」が英仏に奪われてもどこのことか知らない。翰林院のエリートも中国の省都・府・州・県の東西を知らないし、地方官も外国の名を知らないくらいで、その他はさらに責めるに足りないとしている。⁵⁾

1 明代の地理知識

もともと、明代の地理知識といえば科挙受験に関する歴史地理的なものと風水や天文分野に代表される占いに関連したものに分けることができるだろう。そういう点では識字教育とはなじまない。

宋代以来の税安礼『歴代地理指掌図』や楊甲『六経図』の系統をひいて、明初の『五経大全』では書経に「周營洛邑図」・「禹貢所載隨山濬川之図」、詩経に「十五国風地理之図」、春秋に「東坡指掌春秋列国図」等の歴史地図があるが、「東坡指掌」などという名称は如何にも受験業界の地図を取り入れたという感がある。

また、明初の劉基には天文分野説によった地理書『大明清類天文分野之書』24巻があり、明末に発展した日用類書には、「皇明一統二十八宿分野地輿之図」(『五車拔錦』巻2地輿門)のように星宿を記して天文分野説を標榜する全国図

を附すものも現れた。また、王士性『広志繹』巻1、方輿崖略が分野説の不当をいうのは逆に当時の流行を示しているといえよう。⁶⁾顧祖禹『讀史方輿紀要』にも天文分野説の記載があり、当時はある種の常識とされていたといえる。

一方、風水觀念の浸透についていえば、龍脈の概念のもととなった唐の僧一行の山河兩戒説（『新唐書』巻31、天文志）は、北宋末の税安礼『歴代地理指掌図』に収められ（「山河兩戒図」）、⁷⁾その後様々に引用されて影響を与えたようで、南宋の朱熹が北宋の程頤とは対照的に風水に理解を示したのも故のないことではない。明末になると山河兩戒説は日用類書やさらに通俗的なものにもたびたび引用されるようになる。

嘉靖末に風水理論を集大成した徐善繼・徐善述兄弟の『地理人子須知』（嘉靖43年初刻、万暦11年重刊）が「三大幹龍」の論をとりあげて「中国三大幹龍総覽之図」という風水的の世界観にもとづく地図がつくられ、⁸⁾万暦年間の百科全書、王圻『三才図会』巻16や章潢『図書編』巻30にも引用されたほか、崇禎元年（1628）刊の余象斗『地理統一全書』「中国三大幹大明一統図」というものもあらわれた。崇禎頃の余虹虬『四書引蒙翼経図解』にも「天下三大幹附歴代帝都九州二十八宿分野総図」という地図が掲げられて、建陽の書坊の俗書とはいえ経書の参考書にまで引用が見えている。⁹⁾

また、明末の日用類書には、地輿門とは別に宮宅門、地理門、壑宅門、堪輿門などとして風水が取り上げられていて当時の一般化を示している。さらに、朱子（朱熹）も風水を尊重したといわれて『二刻拍案驚奇』巻12 硬勘案大儒争問気 甘受刑俠女著芳名の入話にいささか道化じみた役まわりで取り上げられるのは、いかにも明末の風気を示しているが、福建の朱子と風水の結びつきの觀念の普及を物語っている。

明末になると急に私的な領域での地理知識があふれ出るかのような賑わいをみせる。陸化熙『日嘗小輯』や程百二『方輿勝略』のような新しいスタイルの私撰の総志が数多くつくられ、『大明官制』や日用類書の地理門には地方の府県名や土産を列挙した記載が見られるようになり、鑑賞に供する名山や名勝の絵図や商人が用いる道中案内のような書物も出版された。商業出版の展開につれて地理知識はかなりの程度広範に行きわたったと考えられる。

しかし、この落差は何処から生じたのであろうか。それまでさほど地理に関心を払わなかった文化が、なぜ明末になってから急に地理を取り上げて問題とし、論じ始めたのであろうか。

明末ではそれまでとは異なった特徴として、宋代以来の方志というスタイルで作られていた地理的な説明では不十分になり、公牘を利用した地域の掌故というべき地域性の政書や地図冊の図説説明が編纂、刊行されるようになったことが挙げられる。このような新たな性格の編纂物が、明末の地理知識の在り方を考える一つの手がかりとはならないだろうか。『観風便覧』をはじめとする新たな地理的な政書については以前に触れたことがあるが、¹⁰⁾ここでは初めて明末の地方衙門で作成された地図を手がかりとして考えてみたい。

2 明末の衙門の地図冊

明代に作られた地図には、明の前期以来基準とされてきた『大明一統志』系の地図のみならず、嘉靖後期の『広輿図』の刊行以来、その系譜を引いた地図も『広輿記』や『彙輯輿図備考全書』等の様々な地理書や『大明官制大全』等の政書に附されてきた。しかし、衙門内部で作成保管されてきた明末の地図についてはなお不明な点が多い。

王重民『中国善本書提要』の紹介する明写本『揚州府図説』一卷（美国国会図書館所蔵）は、その提要では、地図は彩色の絵図で、揚州府図の後には「江都」・「瓜州」・「儀真」・「泰興」・「高郵」・「興化」・「宝応」・「泰州」・「如臯」・「通州」・「海門」の各県図がある。全てで十二図あり、各図の後には図説一篇を附して沿革を述べ、明を「国朝」と称している。「通州図説」の内容や字体から明末の万暦年間に編纂されたものだろうという。¹¹⁾

明末の地方衙門で作成された地図の原本が今なお保存されて眼にできることは極めて稀であったが、1980年代の半ばになって現存する明末の地図冊の写真図版が紹介されるようになった。さらに近年次々と公刊された曹婉如等編『中国古代地図集 明代』（文物出版社、1994）のような古地図の図版集の中には、山水図式またはパノラマ図式地図とでもいえるべき明清時代の伝統的な技法で描かれた江蘇や江西・福建・広東などの各省の地図及び図説の写真図版を収める

ものがあり、その彩色された鮮やかな絵図を眼にすることが出来るようになった。

各級の地方区画ごとの山水図式地図が代々描かれていたことは『中国古代地図集 清代』が収める康熙年間の『江西省府県分図』（中国国家図書館所蔵）¹²⁾ や『雲南輿図』（中国科学院図書館善本室所蔵）¹³⁾ などから推測できる。他にも『澳門歴史地図精選』（華文出版社、2000）や中国第一歴史档案館・広州市档案局他編『広州歴史地図精粹』（中国大百科全書出版社、2003）などに種々の地図が収められている。

中でも注目すべきは江西省の地図冊で、明末に描かれた『江西輿地図説』が北京図書館（現在の中国国家図書館）に所蔵されているほかに、さらに康熙年間以降にも上記の『江西省府県分図』や雍正以降の『江西省全図』（北京大学図書館所蔵）¹⁴⁾ などの江西省を単位とする分県図がいくつも現存している。

とりわけ、この『江西輿地図説』が注目されるのは、最も早い時期に描かれた衙門に伝えられた絵図であることと同時に、この地図冊との対照を可能とする同時代の趙秉忠『江西輿地図説』（『紀錄彙編』巻208）王世懋『饒南九三府図説』（『紀錄彙編』巻209）という文献が存在している点である。

『四庫全書総目』巻74、史部 地理類存目に、王世懋の手になる『三郡図説』一卷というものが挙げられている。「四庫提要」では版本に触れられないが、『紀錄彙編』巻209に収められている王世懋『饒南九三府図説』というものがあり、現在見ることができる。これらについては以前の論考で触れたことがあるが、¹⁵⁾ 行論の関係上ここで再度、簡単に説明をしておきたい。

この『饒南九三府図説』の編纂について、『紀錄彙編』本に附された王世懋「三郡地図説跋」は

御史とは天子に代わって各地を視察し、その地では民の状況を観察し、繁簡に応じて官僚の治績を考察する職務である。今、御史の東萊の趙公は、行く先々で必ずその府県の長官に命じて、その地の境域を絵図に描き、そして説明を図の後に付けて、その繁簡・衝僻・難易を考察させた。饒州、南康、九江の三府は世懋の所轄であった。¹⁶⁾

と述べている。即ち、各府州県でその地の境域を絵図に描き、その説明を図の

後につけて、その繁簡・衝僻・難易を考察させた図説が、御史に上げられて集成された図説であったといえる。

饒州府、南康府、九江府の三府が所轄であったということからみると、王世懋の履歴からみて分守饒南九道となったときの編と思われる。王世懋の分守饒南九道の在任は、王世貞「亡弟中順大夫太常寺少卿敬美行状」（『弇州山人統稿』巻140）によれば、万曆四年～七年のことであり、この頃の編纂であろう。東萊の趙公というのは、おそらく趙耀のことで、字文明、山東萊州府掖県人、隆慶五年進士、庶吉士から陝西や江西の巡按御史を歴任したという。¹⁷⁾

この王世懋の跋には、各府州県の「繁簡・衝僻・難易」を考察するために、巡按御史の趙耀が各府県の知事に命じて所轄の地図とその解説を記して上呈させたと記載されている。現存の『紀録彙編』本では地図こそ付されていないが、「三郡地図説」とその跋にいうように、地図を画きその後には解説を付したもので、まさしく巡按御史としての立場から地方行政の必要のために編纂させたものであったといえる。時期はやや遅れるが、同様に巡按御史が関与した地図に、李孝聡「中国古地図の再会」が紹介する清初順治年間に山西巡按御史が上呈した『山西辺垣図』、『山西三関辺垣図』（台北故宮博物院図書文献処所蔵）がある。¹⁸⁾

「四庫提要」では『三郡図説』について、交通の要地であるかどうか、風俗が軽薄か淳朴であるかどうか、民政の利害は皆な要点を挙げており、山川や旧蹟、科挙の合格者、赴任した官僚、詩歌などは重視していないが、これはそもそも古の輿図の法を残しているのである、などと記している。¹⁹⁾

また、同じく『紀録彙編』巻208には、『饒南九三府図説』とよく似た体裁の趙秉忠『江西輿地図説』というものがあり、江西全省の輿地図説を記している。初めに全省の概説を掲げ、次いで南昌府以下の図説を記しているが、万曆6年末に設置された建昌府の瀘溪县が見えることから、万曆7年以降の編と確認できる。

撰者の趙秉忠は万曆二年の進士、福建甌寧県の人で、康熙『甌寧県志』巻6選挙に、江西饒州府樂平県知県として見える人物であろう。同治『樂平県志』巻6、職官によると、万曆9年11月に知県に任ぜられていることから、『江西輿

地図説』は万暦4年～7年の編纂と考えられる王世懋『饒南九三府図説』よりやや時期が遅れたものであろう。

趙秉忠『江西輿地図説』一卷や王世懋『饒南九三府図説』一卷が著録されている『千頃堂書目』巻6には、方志ではなく当時衙門で作成された地図とおぼしきものが著録されている。²⁰⁾ そのなかに『萊陽地理図説』一卷・『蓬萊地理図説』一卷など山東関係の地理図説八種が著録されており、王庸『中国地理図籍叢考』はこれらを海防関係図書として挙げている。²¹⁾ 以上は各県レベルで作られた同様の性格をもつ地図説の存在を示すものと思われる。また、先に挙げた王重民『中国善本書提要』の著録する明写本『揚州府図説』一卷も同様の図説であろう。

衙門の図説とその対象となる絵図の存在が最初に紹介されたのは、鎮江博物館所蔵の絹本『南京（部分）府県地図』で、雑誌『文物』1985年第1期の誌上で紹介された。彩色の絵図の写真図版の他に絵図と図説をともに収めたモノクロ写真があり、当時の地図冊の体裁が初めて明らかにされた。この『南京（部分）府県地図』という名称については、後述の『中国古代地図集 明代』のように『両淮地区府県図冊』とするものもあるが同一の地図冊であり、本稿では以下『南京府県地図冊』とする。

その後、1994年に出版された曹婉如等編『中国古代地図集 明代』には、上述の鎮江博物館所蔵『両淮地区府県図冊』即ち『南京府県地図冊』の写真図版6点と併せて、北京の中国国家図書館に所蔵される万暦年間の絹本彩色の『江西全省図説』の絵図の写真図版6点が掲載され、趙秉忠『江西輿地図説』作成当時の江西省の地図の実物が伝わっていることがわかった。²²⁾ ただし、題名は『江西全省図説』となっており、図説の写真は掲載されていなかったため、趙秉忠『江西輿地図説』との比較対照も不可能で、果して『江西輿地図説』そのものであるかどうか不明なままであった。

ところが、1998年に出版された『中華古地図珍品選集』に『江西輿地図説』として泰和県の絵図と図説の写真図版が収められ、趙秉忠の編纂した『江西輿地図説』との対照が可能になった。²³⁾ その結果いくらかの改訂は施されたもの

の基本的に趙秉忠『江西輿地図説』と一致するということが明らかになった。

また『中国国家図書館古籍珍品図録』（北京図書館出版社、1999）には、『江西輿地図説』の江西全省の図説や吉安府の絵図と図説の写真図版も収められ、その内容をさらに詳しく見るできるようになった。

最近出版された金秋鵬主編『中国科学技術史・図録巻』（科学出版社、2008）は、『南京府県地図冊』の「淮安府図説」の写真図版を掲載し、北京と鎮江の所蔵する二つの明末の地図冊の図説の内容がよりわかるようになった。また、『南京府県地図冊』については、中国国家図書館所蔵の『淮安府図説』や王重民の著録した明写本『揚州府図説』一卷と対照すれば、さらに詳しいことが知られると期待される。これらはいずれも明清時代の伝統的な技法の山水図式地図といふべきものの中で現存する最も古いものの一つといえ、万暦時期の山水図式地図に図説が附された現存例として貴重である。

(1) 鎮江博物館所蔵『南京府県地図冊』

劉建国・徐鉄城「鎮江博物館蔵明代絹本南京（部分）府県地図」（『文物』1985 - 1）が紹介したもので、府州県の図説と地図は揚州府・淮安府・徐州所属の地図29幅と鳳陽府・滁州・和州所属の地図23幅の二冊に装丁されていて、図は横51cm縦31cmで、図説は横51cm縦29 - 30cmという。もともと鎮江焦山定慧寺の所蔵であったが、後に鎮江博物館に移された。図が52幅、図説が53篇（滁州は図説のみが存し地図は失われた）あったという。図説と絵図が上下に一頁に表装されているが、図説と絵図は真ん中で折って装丁されていた痕跡がある。図説は十六行十七字（一字抬頭あり）にわたって記されている。文中では「通州図」、「盱眙県図」、「全椒県図」、「和州図」の図説と絵図、「徐州図」（彩色）、「鳳陽県図」（彩色）および「瓜洲鎮図」（模本）、「淮安府図」（模本）の図版が紹介されている。図版が鮮明でなく判読し難い個所もあるが、一例として「和州図説」を挙げると以下のようになっている。

和州図説

和州故楚地、秦置歴陽県、齊始改置和州、
勝国隸盧州路、領歴陽・含山・烏江三県。

本朝省歴陽・烏江・含山、如故直隸
京師。其鎮梁山、其浸歴湖。江淮水陸之衝
所稱要害者、当利浦為最、在州東十五里。
漢劉繇遣其將張英屯当利、以拒袁術者
是也。其俗賢而好儉。劉禹錫記、其市無蚩
眩工無雕形、無遊人異物以遷其志、信矣。
以視吳越〔像〕巧浮〔夸〕之習、不稱無懷葛天
之國哉。

〔 〕内の文字は不鮮明な個所を仮に補ったもの

即ち、初めに和州の歴史的な沿革を記し、当地の要害である当利浦をあげて、漢末の劉繇が部将の張英を当利に置いて、袁術を防いだという軍事上の故事を紹介し、次いで劉禹錫の「和州刺史庁壁記」（『劉禹錫集』巻8、記上）の文章などから和州の風俗の特徴を記している。『大明一統志』巻17、和州には「鎮曰梁山、浸曰歴湖」（形勝）とか「当江淮水陸之衝」（形勝）、「市無蚩眩工無雕形」（風俗）という表現がなされており、直接にはそれらによって図説が記されたことが想定される。



図1 全椒県図

また、劉建国「明代絹本南京（部分）府県地図初探」（『文物』1985 - 1）では、記載されている水利設備や城池などから判断して、万暦22年から26年の間の製作だとしている。さらに、王士性の著作『広志釋』の記載と一致することや王士性が南京太僕寺少卿や南京鴻臚寺卿に在任したことを根拠に、作者は王士性である可能性を指摘している。

但し、先述の江西での王世懋『饒南九三府図説』の事例から見ても、各省の巡按御史のレベルで作成されたと理解するのが順当であり、王士性は万暦20年代の衙門に存在していた図説を引用したと解され、王士性自身が直接編纂に加わった可能性は少ないだろう。

その後出版された『中国古代地図集 明代』では、同じ地図冊を『兩淮地区府県図冊』（第68 - 73図）、という名称で記し、淮安府・鳳陽県・泗州・塩城県・含山県・瓜洲鎮の6図を掲載している。さらに『中華古地図珍品選集』には『南京府県地図冊』の「淮安府図」と「全椒県図」の鮮明な図版が掲載されている【図1】。また、最近の金秋鵬主編『中国科学技術史・図録巻』も、『南京府県地図冊』という名称で紹介している。²⁴⁾その中で上文下図の「淮安府図説」の彩色図版（図5 - 20、174頁）が掲載され、十六行十七字にわたって「淮安府図説」が記されている【図2】。

淮安府図説

淮安禹貢揚州之地。其置淮陰郡則自唐
天官始。其後屢有改置。宋紹定初于此置
淮安軍。端平間、陞為州。元為淮安路、屬河
南行省。

本朝改淮安府、直隸

京師、領州二、為海、為邳、県九、附郭為山陽、其
外為塩城、為清河、為安東、為桃源、為沭陽
海之属、為贛榆、邳之属、為宿遷、為睢寧。郡
有三城、南為旧城、築自晋。北為新城、築自
洪武初。中為聯城、築自嘉靖庚申間。雉堞
相連、樓櫓相望、滯山阻海控扼千里、天下

称要害焉。而黄河自北直趨与淮相敵、至清口河合流。郡地寔居其委、為二水所吞、民間廬室漂没、至登陴爰處、僅免魚鱉。又安問耒耜乎。司民牧者所宜究心也。

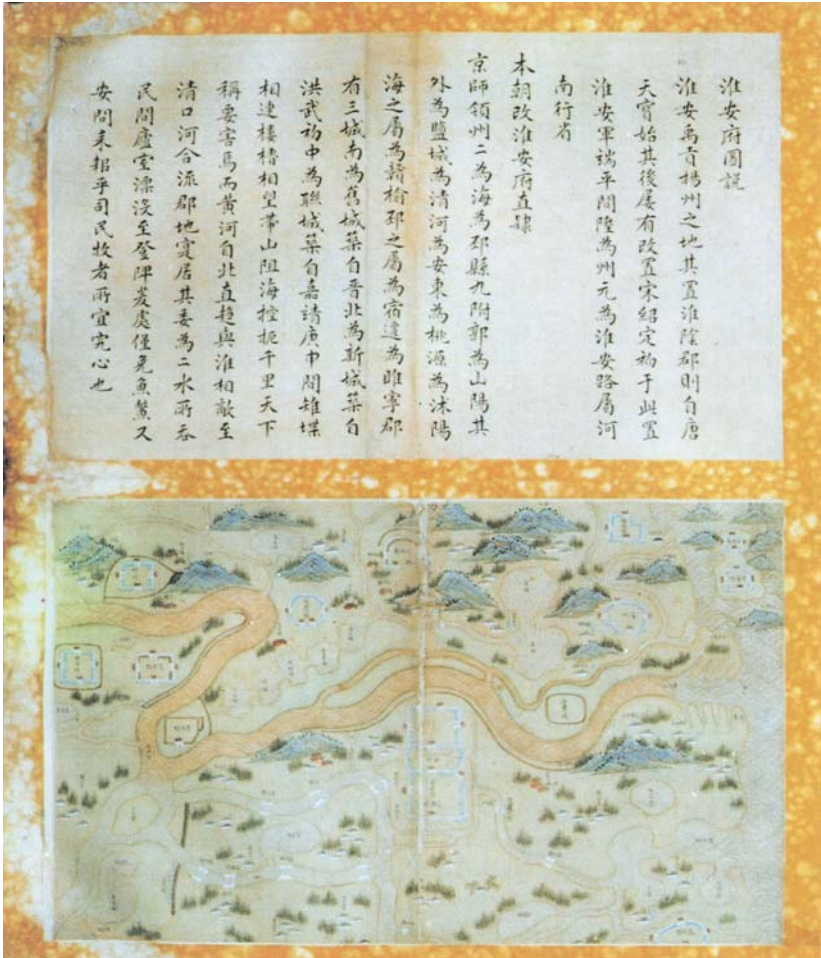


図2 淮安府図説

(2) 中国国家図書館所蔵『江西輿地図説』

万暦年間の江西の地図冊を初めてとりあげたのは、『中国古代地図集 明代』で、『江西全省図説』（第62 - 67図）という名称で記し、江西布政使司図（2図）・饒州府城図・贛州府図・浮梁県図・泰和県図の6図を収めている。^{25）}孫果清の解説によると、現存する地図は37幅で、全省の総図（縦26cm横56.5cm）が1図、各府県の分図（各縦28cm横26.5cm）が36図で、皆な図説を付している。描かれるのは山嶺・河流・湖泊・樹木・城池及び衙署・寺廟・駅舗などの建築で、彩色は鮮やかで非常に美しい。内容豊富で図と文ともに優れた地図作品であるだけでなく、さらに江西全省の壮麗な山河を反映した貴重な芸術作品である、と記している。ただし、この地図集自体はいずれも古地図の紹介を主としていて、図説の存在は指摘されていても、必ずしも図説の内容を明らかにするものでもなく、図説自体は関心の外に置かれていたといえる。

『中国古代地図集 明代』では『江西全省図説』としていたが、1998年に出版された『中華古地図珍品選集』では、この同じ地図冊を『江西輿地図説』として紹介し、江西布政司の全体図、袁州府図、泰和県図の3図（第89 - 91図）を掲載した【図3】。

その説明文には中国古代地図伝統の地物・地貌をイメージ化する手法で描き、



図3 江西布政使司図

江西省・各府・各県の地理的概況を精密に描き、図説と図を組み合わせて当地の歴史沿革・地理特徴・險要及び風俗等の状況を記述している、などと述べられている。²⁶⁾

『中国古代地図集 明代』では絵図しか載せられていなかったが、泰和県図に付された図説が『中華古地図珍品選集』の第91図（124頁）にみえる【図4】。見開きの右側は泰和県図であるが、左側に泰和県の「図説」が九行十六字にわたって記されている。²⁷⁾

この内容は『紀錄彙編』に収める趙秉忠『江西輿地図説』の泰和県の條の「繁簡考」とほとんど同じであり、趙秉忠の編纂になる万暦時期の『江西輿地図説』をもとにして改訂された実物が現在まで伝えられたと考えてよい。

『紀錄彙編』巻208、趙秉忠『江西輿地図説』の同じ部分と対照すると以下のようになる。

泰和縣 最衝 最繁 刁

泰和濱贛水、而邑原隰畏潦、鄉谷畏盜、地執然也。訟蝟興而賦猷逸、剝課称艱。且路當吳楚閩越之周、館人津吏頗繁苦矣。邑西十里為破塘口、正贛水所擊射、數十年來洪濤囊圯、江勢將遶邑背而東徙。民虞蕩墊、（日皇皇奔訴）堤障之謀、岌維孔棘哉。（多方籌濟、近日七里隄始告成、民賴無怨。）若乃崇雅砥節、文獻雲蒸則自昔號彬彬云。



図4 泰和県図説

()内の文字は『紀録彙編』には見えないが『江西輿地図説』にある文字で、下線部分は『紀録彙編』本にのみ見える文字である。『紀録彙編』本が記された時には、堤防は未完成であり、その後の「近日七里隄始告成」という変化を反映して図説が改訂されたことがわかる。道光『泰和県志』巻3、輿地に、破塘口の記事があり、万暦3年に知県の唐伯元が堤防を築いたという。²⁸⁾

その後出版された『中国国家図書館古籍珍品図録』には、『江西輿地図説』の写真図版(第305図、280頁)が二点収められているが、その中に二つの「輿地図説」が採録されている。一つは「江西全省図説」で一頁に十行十四字で記された冒頭部見開き2頁の写真図版が収められ【図5】、もう一つは吉安府の絵図と図説で、右側に絵図、左側の一頁に十四行十八字で記された図説の写真図版が収められている【図6】。

吉安府の図説の内容は以下のようにになっている。また、『紀録彙編』に収める『江西輿地図説』の同じ吉安府の部分を対照のため併記してみる。



図5 江西全省図説



図6 吉安府図説

中国国家図書館本「吉安府図説」

吉安府 最衝 最繁

吉安秦漢時九江廬陵郡屬南部都尉理
所安成名肇三国唐以後号吉州今日吉
安府府治拋江上流南接章貢北竟淦水
東控臨汝西躡袁桂規土二千余里咽喉
荆廣唇齒淮浙神岡揖其前螺山巋其後
江流迴合東其下古所謂天作之邦文章
節義鳴中国蓋自顏魯公流風歐陽公八
代颺拳文文山兩間正氣逮

熙朝雅蓋翔翔匪秭文科第已耳顧岐旁比
壤劇驂攸會適館授綬比比苦困矣土瘠
民稠所資身多業鄰郡其俗尚氣君子重
名小人務訟兼之軍民雜襲豪猾猥膳吏
治鮮效廬陵泰和最稱難理永寧龍泉稍
稍易治云

『紀錄彙編』本 吉安府

吉安府 最衝 最繁 刁

吉安秦漢時九江廬陵郡屬南部都尉理
所安成名肇三国唐以後号吉州今日吉
安府府治拋江上流南接章貢北竟淦水
東控臨汝西躡袁桂規土二千余里咽喉
荆廣唇齒淮浙神岡揖其前螺山巋其後
江流迴合東走其下古所謂天作之邦文
章節義鳴中国蓋自顏魯公流風歐陽
公八代颺拳文文山兩間正氣逮

熙朝雅益翔翔匪秭文科第已爾顧岐旁比
壤劇驂攸會適館授綬綵獵獵比比苦困矣
土瘠民稠所資身多業隣郡其俗尚氣君
子重名小人務訟兼之軍民雜集豪猾猥
膳吏治鮮效廬陵泰和最稱難理永寧龍
泉稍稍易與云

下線部分は『紀錄彙編』本にのみ見える文字である。これらの図説を『紀錄彙編』の記載と対照するとほぼ同一内容であることがわかる。

これらの絵図の原型は、海野一隆「絵画としての地図」²⁹⁾がいうように賈耽「海内華夷図」にまでつながるのかもしれないが、直接には、北宋の景德四年(1007)に画工を各地に派遣して製作させたという「景德山川形勢図」(『玉海』巻14)のようなものが基にあったのであろう。海野一隆「絵画としての地図」の紹介する内閣文庫蔵の明代写本『皇輿図』はその流れを直接に汲むものといえる。

数少ない例でしかないが、このような地図説は方志とは異なる面で、また、かなり現実的な意味で地方の実情を具体的に明らかにしている。土地が瘠せていて人口が過密だとか、訴訟が多いとか、洪水の被害が大変だとかいう、現状を直截に記している。

また、『江西輿地図説』と『南京府県地図冊』とを比べて異なる点は、『南京府県地図冊』には衝・繁の評語がないこと、また、『大明一統志』のように必ず歴史地理的な沿革から図説が始まっていること、秦末の項羽(『全椒県図』)や三国時代の袁術(「和州図」)などが登場した過去の戦いと現地の要害とに触れている点である。

3 山水図式地図の系譜

南北朝を統一した隋唐帝国になると全国的に行政組織が整い、図経を地方衙門から中央に上呈させるようになり、隋では尚書(『隋書』經籍志地理類総叙)、唐では兵部の職方司が管轄した(『通典』巻23兵部、『大唐六典』兵部)。この後、清末まで地図は兵部の職方司が管掌することとなる。『明史』巻七十二、職官志一、兵部では、

職方司は輿図・軍制・城隍・鎮戍・簡練・征討の事を掌る。天下の地里と險易遠近や辺腹の疆界はみな図本があり、三年ごとに一度報告し、官軍や車騎の数とともに上呈する。³⁰⁾

とあり、「図本」を三年に一度上呈するという規定が存在していた。『大明会典』では三年ごとに一度、地図を送らせる規定があった。戸部では「図志」があり、

古今沿革や山川險易、戸口賦税の多寡の数値を記載していた一方で、兵部では諸辺の境界には各々「図本」があって地形を知って防御の策を立てるためのものであった、としている。³¹⁾また、『明史』巻15、孝宗本紀では弘治十四年(1501)五月に、各布政司の地里図を上呈するように命じている。

省レベルで編纂されたと思われる『江西輿地図説』の現存の形式が山水図であったということは、これらの規定で兵部職方司が集約した各地の地図の形式が方格図ではなく山水図であったことを示すものだろう。前述の内閣文庫蔵の明代写本『輿地図』はその蓄積のもとで描かれたものといえる。

『大明一統志』や各地の方志に描かれる地図は精粗の差こそあれ、概ねこの山水図方式の地図といってよいのは、各級衙門で編纂された地図がもともと山水図式のものであったからなのだろうし、さらに方志には絵画としての表現、雅な図が求められていたからであろう。

その究極の形は『乾隆十六年南巡各地詳図』³²⁾のように、天地の間にあって九州を掌中に収めるかのような情景を楽しむという風情のものになる。【図7】では北京の城壁や門楼、西郊の盧溝橋や寺院の塔、東には通州の城壁や大運河を行き交う船が鳥瞰できる。

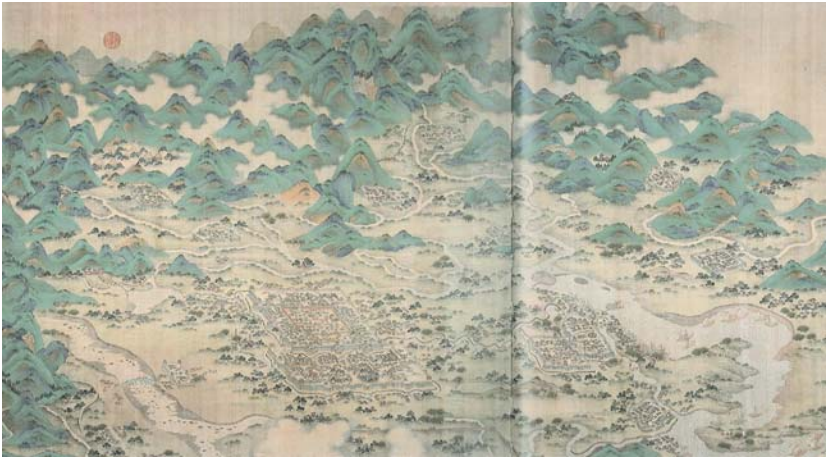


図7 乾隆十六年南巡各地詳図（北京附近）

一方、山水図形式の地図を単純化させたものが『大明一統志』系の山と河川と地名に簡略化された地図となり、絵図ではなく印刷されるような場合にはこうした簡略化された地図が版刻されるようになったと解される。

最近、北京大学図書館の所蔵する清代の彩色絵地図が、国家清史編纂委員会図録叢刊の一つ、北京大学図書館編『皇輿遐覽－北京大学図書館蔵清代彩繪地図』（中国人民大学出版社、2008）として出版された。その中には二種の分省図が収められている。一つは康熙58年の『皇輿全覽図』の彩色された分省図とされるもので、「北京城図」・「盛京全図」・「熱河図」・「河套図」・「口外諸王図」・「山東全図」・「江南全図」・「浙江全図」・「河南全図」・「山西全図」・「陝西全図」・「哈密全図」・「四川全図」・「雲南全図」・「貴州全図」・「福建全図」・「広東全図」の関外の各地域と（湖広と広西を除いた）各省の絵図の18の図版が収められている。これは『皇輿図』のような方格図とは異なり、『皇輿全覽図』と同じく経線と緯線を梯形に投影した直線が図上に引かれていて、南北と東西に直交しているわけではない。しかし図全体は彩色を施して河川の流れと山並みを描いていて、受ける印象は伝統的な絵図と異ならない【図8】。



図8 皇輿全覽図（山東全図）

他の一つは、『国朝天下輿地全図』と題されていて、乾隆 24 年から 28 年にかけて作成されたとされている。これは従来と同じく伝統的な地図で『大明一統志』的な分省図に河川の流れと山並みを描いて府県を記号で図示し、彩色を施したもので、「国朝天下輿地全図」と題された総図と「盛京興京統図」から「新疆」までの分図、計 21 幅の図版が収められている。明末にイエズス会の宣教師たちが新たな地理知識を伝えても、伝統的な絵図を作成する構造は引き続いて強固なようにみえる。

こうしてみると、衙門での絵図に込められた意味は『広輿図』の追求したような正確さとは意味が異なっていたのではないか。例えば、方志の地図には官僚の視点が反映されており、その結果として『広輿図』のような方格地図にみえる正確さよりも、官府や学校などの政治的文化的権威が強調されることになったという。³³⁾また、兵要地誌を表現するには、イメージでつかめるだけ絵図のほうが適していた。そして、羅洪先『広輿図』の方格図が地名と単純化された記号とからなっているのも、如何にも雅でない。³⁴⁾

モンゴル時代に入ってきた経緯線と地名で表現されるイスラーム式の地図、例えば「元経世大典地理図」（魏源『海国図志』巻 2、60 巻本）などは定着しなかったし、海野一隆「朱思本の『輿地図』について」（『史林』47 - 3、1964）は、方格図としての『広輿図』がもとにした朱思本『輿地図』の正確性を評価しているが、そのイスラーム地図学の影響に関しては否定的である。また、「西域図略」のようにイスラーム系の地図を資料としながらも、『大明一統志』の附図のような単純化した線で山地や河流を表現し、騎馬や耕作の人物像や樹木、獅子などを点景として置いて、中国風の建造物を描きこんだ中華風の地図に変換された例もある。³⁵⁾中国では地図というものに対する観念がかなり固定的であったようである。

このような地図の作成に際して存在していた強固な伝統と明末の様々な地図に表れた新たな地理知識の在り方の両者を如何に理解すべきなのであろうか。

4 明末の地図

明代の地図の一つの画期は嘉靖後期の羅洪先『広輿図』の刊行にあった。『広

輿図』は元の朱思本「輿地図」をもとにして作成された方格図の地図帳で、その後『広輿図』の影響を受けて一連の地理書・地図が編纂されたという地理学史の一つの転換点になっていた。正確な方格図を収めた『広輿図』は歓迎されて『大明官制』五卷本、『広輿考』、『広輿記』など様々な書物に引用された。³⁶⁾

明末の陳組綬『皇明職方地図』、潘光祖『彙輯輿図備攷全書』、呉学儼等編『地図綜要』、王光魯編纂の『閲史約書』の朱墨二色刷りの沿革地図、呉国輔等編の歴史地図集『今古輿地図』など種々の自己主張を伴った地図はその系譜の末に生まれた。また、王鳴鶴『登壇必究』などの兵書にも多くの『広輿図』系の地図が収められている。『広輿図』自体も清代まで何度も版を重ねて利用され、『広輿図』系の地図は清末まで命脈を保った。

ただし一般に明末の日用類書の地図では、「皇明一統二十八宿分野地輿之図」(『五車拔錦』巻2地輿門)のように山東半島の突出が見られない。即ち、『広輿図』以前の賈耽「海内華夷図」を源流とする税安礼『歴代地理指掌図』の系統を引く地図であろう。³⁷⁾後代の乾隆間刊『東園雜字大全』の「天下図」も山東半島が出っ張っていない。

『広輿図』系の地図自体も全くの庶民のものというわけではなく、士人の手に取るやや高級で専門的な類に属するもので、普通の書肆が出版の際にもとづいた地図は手近にある利用し易いものであったのだろう。いささか正確さに欠ける坊刻の地図とはいえ、かなりの程度普及していたことは考えられる。

商業出版の発展は、歴史の受験参考書を多く生み出したが、それと軌を一にして歴史地図も需要が高まったのであろう。他にも、王光魯『閲史約書』の朱墨套板の沿革地図が『綱鑑歷朝捷録』という科挙受験の俗本に剽窃されたことが知られている。³⁸⁾

また、明末にはイエズス会の宣教師がやってきて新たな地理知識を伝えた。ただし、「坤輿万国全図」に代表されるマテオ・リッチの伝えた世界知識も馮應京『月令広義』、程百二『方輿勝略』、方以智『物理小識』などリッチと直接の交友関係があった人々やキリスト教信者の著作にとりあげられることはあったが、一部のキリスト教信者の士大夫を別にしてどれだけ定着したかは疑問である。³⁹⁾

章潢『図書編』はリッチの説も一説として紹介したが、対抗意識から仏教系の「南瞻部洲図」をもとにした「四海華夷総図」を作っているし、⁴⁰⁾崇禎年間の『皇明職方地図』ではリッチ図の世界知識は「議而不論」として捨て置かれたという。⁴¹⁾周辺に夷を添景としておく税安禮の「古今華夷区域総要図」は、賈耽「海内華夷図」の内容を留めているといわれるが、明末清初の漢民族社会での世界地図も華夷図式に中華の周辺部に夷である西洋系の地理知識を採用するという、あくまでも伝統的な枠組みを崩さないものであった。

それに対して、中華的世界観の枠組みを超えた世界像を提示しようとしたのが潘光祖『彙輯輿図備攷全書』といえよう。従来の書物ではただ「十三省と九辺の諸輿図」を収めるだけであるが、これはマテオ・リッチ（利西泰）の世界図を巻首に収録し、世人にはっきりと中国の外にこのような大きな世界が広がっているという新しい世界認識を知らせようと『彙輯輿図備攷全書』凡例で述べている。⁴²⁾

これは『方輿勝略』の地図を引用したものではあるが、実用性の追求が従来の地理書の枠組みを越えて新奇な知識の受容をもたらしただといえる。そして、馮応京の指授による『方輿勝略』のように直接リッチと関係のあったものでなく、版築居のような一般の南京の書肆が出版したことに、かえってより広い受容の可能性を感じられる。しかし清代になって多くの地理書籍が禁書となったことでリッチ図のような新知識を受容する可能性は失われた。

ひるがえって、日本ではリッチ図はある種の文化的なファッションとなり、意匠、デザインとして定着した。海野一隆が紹介したように、江戸時代の日本ではリッチの世界図に代表される西欧の世界地図の影響は、通俗的・啓蒙的な書物にまで及んだ。平住専庵『唐土訓蒙図彙』『山川輿地全図』（享保四年、1719）をはじめ、民族図譜とあわせて刊行された正保年間（1644~48）刊「万国総図」や、貞享五年（1688）刊の石川流宣『万国総界図』を産み出した。さらに「万国総図」系の世界図は元禄十一年（1698）刊の『頭書増補大成節用集』の「世界万国総図」や享保十二年（1727）刊『大字万国節用福字通便』の「世界万国人物総図」など『節用集』の類にまで収められ、十九世紀になっても版行が繰り返され、蘭学系世界地図が登場するに至ってその役割を終えることとな

る。⁴³⁾

中国文化の辺縁に存在していた江戸時代の日本では、仏教界の反発は生じたもののリッチ図の新知識は受容され、その後も一定の形で定着した。明末の中国では受容の契機は存在したが結局定着はしなかった。その差違は、権力者の性向によるのかもしれないし、科挙による知識の規制の有無によるのかもしれない。しかし、唯の知識ではなく、世界を如何に理解するかということであるから、新たな世界像を受容することは異なる宗教を信じることに同様である。確固とした世界観を形成していた中国の知識人にとっては受け容れがたかったのも無理ない。カトリックの宣教師に対する態度の差にも現われているが、日本のキリシタン大名のように社会の上層にいる皇帝や士大夫が新たな世界像を受容しなければ定着は難しいだろう。

日本ではリッチ図系の世界地図と異国の風俗図はよく対になって描かれていた。それに対し明末の世界地図を掲載した書物には、本質的には外国の風物に対する関心は少ない。世界地図も観念的には中国を中心とする天下を描くためのものであって、直接外国に対する関心が基にあったのではない。

結語：地理学史上の明末

はじめに記したように、大まかな天文分野説や風水の理論は、様々な場面で表現されているが、個々の具体的な地名と結びついた地誌情報は天文分野説や風水とは結びつかない。地誌情報はことに万暦以降になってから、商業出版の発展の過程で一般化したようにみえる。

路程書のような旅行関係の書物も『寰宇通衢』⁴⁴⁾のような本来は公的な情報を私的な領域にも利用したものである。游记や名山記といった鑑賞用の書物を別にとすると、地誌情報が一般化するようになった直接のきっかけは、『大明官制』五巻本の増補にみられるような官刻本の変化ではなかったか。

書坊による『大明一統志』の出版や『大明官制』の出版は、初めは内府で作られた本来の官刻本のスタイルを守っていたが、やがて時代の必要に応じてか、様々な改訂が施されるようになる。『大明一統志』では万暦年間の万寿堂刊本になって、編戸の里数が改訂されたり、従来はなかった税糧のような性格を異

にする記載が加えられたりしたし、『大明官制』や『広輿記』のように本来はなかった『広輿図』系の地図が加えられる例がまま見られた。

そして、日用類書の地理門や官品門、商旅門といった部門には、『大明官制』や路程書のような記載が存在し、地方官僚の官員録である緡紳便覧が編纂され始める。⁴⁵⁾ 個々の地名を記載した書物が格段に普及し、地理知識があふれ出すようになる。明末の地理知識は、商業出版の場面で確実に充実し変化を遂げた。

『大明官制』五巻本の各省の冒頭には「附地里繁簡考」として各省の評価というべき按語がまとめられている。これは『大明官制』五巻本の重修官制凡例に、以前の版には各府県が交通の要衝にあたっているかどうかや税額の多少についての項目はなかったが、隆慶元年八月に題准を経た「新定地里繁簡考」は現在の政治に役立つものだから、各項目ごとに付け足して広く伝えよう、⁴⁶⁾

という隆慶元年八月に題准された「新定地里繁簡考」のことで、当時の吏部尚書の楊博が上奏した「奉詔酌議郡邑繁簡疏」（『蒲坂楊太宰献納稿』巻五、内閣文庫蔵）にみえる文章をそのまま引用したものである。中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館に所蔵される『大明官制』五巻本は、巻1と巻2が鈔補された巻3から巻5までの残本であるが、五巻本としては最も早いものである。その原刊の部分の第5巻巻末には「隆慶戊辰仲春吉旦重刊」の蓮牌木記があり（戊辰〔隆慶2年〕）、早くも楊博の上奏の翌年には、楊博が上奏した内容を利用して増補された『大明官制』の改訂版が作られていたことがわかる。

そして、重修官制凡例で時政に役立つとされた「地里繁簡考」は『大明官制』五巻本以来、さまざまな書物に引用されるようになる。管見のかぎり、『大明官制』以外でもっとも早くこの「地里繁簡考」と吏治の評語を用いているものは、万暦23年序のある盧奇『職方攷鏡』や『格致叢書』の編者として知られる胡文煥の編著である。『職方攷鏡』六巻は、各省の首に「地里繁簡考」を挙げているし、『大明官制』を参考にして「僻劇醇澆」を示したことを凡例に記している。また、胡文煥『華夷風土志』（内閣文庫蔵）は『大明官制』五巻本に見える衝繁僻難などの吏治の評語をそのまま再録し、「地里繁簡考」を各省の初めに付すと

いうものである。『華夷風土志』凡例には、「風俗」は『大明官制』五卷本に拠った事、『広輿図』によって各州県の上・中・下の三等を記したことを明らかにしている。

万暦10年前後と想定される江西の地図冊に、繁簡考や吏治の評語が記されていたこと、そして『大明官制』五卷本を通じて同様の知識が、万暦20年代の著作に引用されるに至ったことがわかる。衙門内部の情報を書坊が出版したことで、共通の知識と為し得たことから、地理書の内容と方向が従来と異なった方向へ向かい始める。

官僚機構の中で公的な場面で地図に対する扱いそのものは変化しなかったが、一般では利用しやすい手軽なものへの変容という点で、官刻の権威が侵害され新たな表現形式が発明された。地図説をこのような「地理繁簡考」を取り込んだ形式で編纂したこと、そして一部とはいえ刊行公開されたこと自体が、一つの明末的な在り方であったといえる。

明末になると、宋代以来の方志というスタイルで作られていた地理的な記述では不十分になったようで、地域の問題解決のために、新たな地理的な政書が作られるようになり、公牘を用いた『観風便覧』⁴⁷⁾や公牘そのものというべき地図冊の図説説明が刊行されたりした。即ち、その背景にはそれまで衙門の内に秘められていた公的な地理情報が刊行されたことによって、地理情報に関しては公的な領域の知識が私的に論じられるという変化が生じた。

同時に、公牘の利用といえば明末には実録や邸報の利用の事例が少なからず見られたことを想起させる。⁴⁸⁾顧炎武のような博引傍証のスタイルはそのような利用可能な資料群という前提があって生まれたとあってよい。考証学・実証主義の前提となったのは利用可能な豊富な史料の存在であり、清朝考証学の基には明末の出版文化の発展があったことを無視することはできない。地理学史の上からも明末は豊かな内容をもった時代であったと言い得よう。

その明末清初のある意味で象徴していた顧祖禹の『讀史方輿紀要』を清末の張之洞『書目答問』は「此の書は専ら兵事の為に作る、意は地理考証に在らず」と注記して兵書に分類した。⁴⁹⁾ 伝統中国の感覚では、地理の知識を身につけるのは兵要地誌を修める兵学の延長のような特殊な技芸という位置づけで、未だ

に読書人が学問として学ぶべきものではなかったと見なされていたのかもしれない。まして世界地理の知識などは意識の外に置かれてもしかたない。

伝統中国における地理書の最高峰として存在する顧祖禹『読史方輿紀要』が、世界の認識ではなく、地域の理解、天下古今の歴史地理的考証を大成したものであったという点に、中国の伝統的な地理学の本質とある種の限界を読み取ることができよう。

図版出典

図1：『南京府県地図冊』「全椒県図」

中国測繪科学研究院『中華古地図珍品選集』（哈爾濱地図出版社、1998）121 頁

図2：『南京府県地図冊』「淮安府図説」

金秋鵬主編『中国科学技術史・図録卷』（科学出版社、2008）174 頁

図3：『江西輿地図説』「江西布政司図」

中国測繪科学研究院『中華古地図珍品選集』（哈爾濱地図出版社、1998）122 - 123 頁

図4：『江西輿地図説』「泰和県図」

中国測繪科学研究院『中華古地図珍品選集』（哈爾濱地図出版社、1998）124 - 125 頁

図5：『江西輿地図説』「江西全省図説」

『中国国家図書館古籍珍品図録』（北京図書館出版社、1999）280 頁

図6：『江西輿地図説』「吉安府図説」

『中国国家図書館古籍珍品図録』（北京図書館出版社、1999）280 頁

図7：乾隆十六年南巡各地詳図（北京部分）

『中国国家博物館館蔵文物研究叢書』明清檔案卷、清代（上海古籍出版社、2007）400 - 401 頁

図8：皇輿全覽図（山東全図）

北京大学図書館編『皇輿遐覽 - 北京大学図書館蔵清代彩繪地図』（中国人民大学出版社、2008）16 - 17 頁

注

- 1) 海野一隆「漢民族社会における歴史地図の変遷」及び、海野一隆「在鎮江宋代石刻『禹迹図』観覧記」、ともに海野一隆『東洋地理学史研究 大陸篇』（清文堂、2004）所収。
- 2) 例えば、『雑字類函』（学苑出版社、2009）に収める崇禎刊『五刻徽郡积義經書士民便用通考雑字』など。
- 3) 蕭良有「職方攷鏡序」
世豈尠月露風雲、駢四驪六、膾炙人口吻者哉。而往往稽山川則靡当、説土風則失實、譚賦額則結舌、語沿革則閉唇、志曰、不出戸知天下、儒者博雅之謂、何而能忸然此也。
- 4) 『幼学瓊林』卷1、地輿
北京原属幽燕、金台是其異号、南京為建業、金陵又是別名。浙江是武林之区、原為越国、江西是豫章之郡、又曰吳臯。……
- 5) 『康有為全集』第三集（上海古籍出版社、1992）682頁。
若夫割野人山地於英也、吾使者不知、待詢於英之外部、割滇界土司於法也、大臣不知中辺、至割腹裏土司於法人。至夫詞館之英不知中国省会郡邑之東西、疆土之吏不知全地外国之名号、其他更不足責已。（康有為『日本書目志』卷四、図史門）
- 6) 王士性『広志釋』卷1、方輿崖略
分野家言、全無依拠。如以周・秦・韓・趙・魏・齊・魯・宋・衛・燕・楚・吳・越平分二十八宿、蓋在周末戦国時国号意分野言起於斯時故也。後世疆域分合不齊、乃沿襲陳言、不知變通。如朝鮮、古封建為中国之地、以其後淪為夷狄、故不及之。夫地有此土、則天有此辰、人自不及之耳、彼国土豈本不对天星乎。
- 7) 曹婉如他編『中国古代地図集 戦国一元』（文物出版社、1990）第98図。
- 8) 曹婉如等編『中国古代地図集 明代』（文物出版社、1994）第201図。
- 9) 海野一隆「漢民族社会における歴史地図の変遷」第26図。
- 10) 大澤顯浩「地理書と政書」（『明末清初の研究』京都大学人文科学研究所、1996）

- 11) 王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、1983）193頁。
図用彩絵、府図後為「江都」・「瓜州」・「儀真」・「泰興」・「高郵」・「興化」・「宝应」・「泰州」・「如臯」・「通州」・「海門」、都十二図、各図之後、附説一篇、説叙沿革、称明為“国朝”。「通州図説」云、「往甲寅、倭夷犯順」。此指嘉靖三十三年事也。又「海門図説」云、「其県治薄蝕江海、迨国朝凡四徙」。考『明史』卷四十地理志、記「正徳七年徙治余中場、嘉靖二十四年徙金沙場」。『光緒海門庁図志』、因之、均僅二徙、其不詳年月之二徙、不知在嘉靖二十四年之前或後也。茲以「通州図説」所記年月、並写本字体推之、蓋纂写於万曆間也。
- 12) 『中国古代地図集 清代』（文物出版社、1997）、第20図
- 13) 同上第5図
- 14) 北京大学図書館編『皇輿遐覽－北京大学図書館蔵清代彩絵地図』（中国人民大学出版社、2008）に収める『江西省全図』は雍正九年から乾隆八年にかけての製作とされる。
- 15) 大澤顯浩注10)に同じ。
- 16) 王世懋「三郡地図説跋」
直指使者、代天子省方、以輿地觀民風、以繁簡稽吏治職也。今使者東萊趙公、皂蓋所至、必命其郡県長吏、図其地境、而系説於図後、以稽其繁簡・衝僻・難易。饒（饒州）南（南康）九（九江）三郡、世懋所轄也。
- 17) 『明史』卷225 趙喚伝によると趙喚の兄。張居正の奪情に際して左遷されたようである。乾隆『掖県志』卷四 政治には、
趙燿、字文明、隆慶辛未進士、由庶吉士、擢御史按江西、以忤張居正帰。後擢兵部郎中、歴藩臬清正率属。
とあり、『国権』卷81 万曆三十七年四月丁卯に、同内容の記事が見える。
- 18) 李孝聡「中国古地図の再会」（『大地の肖像』京都大学学術出版会、2007）
- 19) 『四庫全書総目』卷七四、史部 地理類存目『三郡図説』一卷〔兩淮塩政採進本〕
『三郡図説』一卷（兩淮塩政採進本）明王世懋撰。世懋有『卻金伝』、已著録。是編乃其官分守九江道時所作。三郡者、一饒州、二南康、三九江、皆所隸也。凡地之衝僻・俗之澆淳・民之利病、皆撮舉其大端、而不以山川・

古蹟・登臨題詠為重、蓋猶有古輿図之遺法。未有世懋自跋、稱直指使者東萊趙公命郡縣長吏図其地境、而系説於図後、既而以所説失實、屬世懋改定之、故以図説為名、而不具其図云。

20) 『千頃堂書目』卷六、卷七から当時衙門で作成された地図とおぼしきものを挙げると以下のようなになる。

北平八府図総目一卷

北平府図志一冊

大興県図志二冊

宛平県図志二冊

萊陽地理図説一卷

蓬萊地理図説一卷

黄県地理図説一卷

福山地理図説一卷

棲霞地理図説一卷

招遠地理図説一卷

寧海地理図説一卷

文登地理図説一卷

岳元声三県経界錯壤図説

趙秉忠江西輿地区説一卷

王世懋饒南九三府図説一卷

虔台輿図要覧六卷

虔台撫属地区一卷

湖広省指掌図

黄元忠岳都図説一卷

湛若水嶺南輿図二卷

姚虞嶺海輿図一卷

21) 王庸『中国地理図籍叢考』(上海商務印書館 1956 修訂) 甲編、明代海防図籍録、116 頁。

22) 曹婉如等編『中国古代地図集 明代』(文物出版社、1994)。なお、同地図

集には『淮安府図説』の写真図版4点も収められているが、やはり図説の紹介はみられない。鄭錫煌の解説によれば、縦30.5cm 横51cm、北京図書館（現在の中国国家図書館）の所蔵で、万暦11年以降に編纂されたと考えられる。一つの図に一つの説明がついていて、収録された第25図から第28図（淮安府図、海州図、塩城県図、沭陽県図）の4図のほかに、邳州、山陽県、睢寧県、清河県、桃源県、贛榆県、宿遷県、安東県の計12の彩色絵図と図説があるという。

- 23) 中国測絵科学研究院『中華古地図珍品選集』（哈爾濱地図出版社、1998）所収『江西輿地図説』泰和県図説。第91図（124頁）。
- 24) 『中国科学技術史・図録巻』（科学出版社、2008）第5章 地学（174頁）。なおその解説に万暦22年から26年の制作で作者は王士性かもしれないというのは『文物』の劉建国の見解によったものであろう。
- 25) 『中国古代地図集 明代』では『江西全省図説』としているが、後述のように図説の内容から見て『江西輿地図説』とするべきであろう。
- 26) 「図説与図配合記述了該地歴史沿革・地理特徴・險要以及風俗等情況」（『中華古地図珍品選集』124頁）
- 27) 『中華古地図珍品選集』所収の『江西輿地図説』泰和県図説の写真図版より以下に記載する。

泰和縣 衝 繁 刁

泰和濱贛水而邑原隰畏潦鄉谷畏盜地
執然也訟蝟興而賦獸逸剽課稱艱且路
當吳楚閩越之周館人津吏頗繁苦矣西
十里爲破塘口正贛水所擊射數十年來
洪濤襄圯江勢將遶邑背東徙民虞蕩墊
日皇皇奔訴孔棘多方籌濟近日七里隄
始告成民賴無怨若乃崇雅砥節文獻雲
蒸則自昔號彬彬云

- 28) 道光『泰和県志』卷3、輿地、46頁。
破塘口、磯、明万暦三年、知県唐伯元築。自罈頭至將軍渡、凡七里完堤三

百余丈。又堤八百余丈直達麁山。計石磯五座外、為水府祠碑亭一所。邑人陳昌積有記。

また、同『泰和県志』巻32、芸文中に、陳昌積の「修築破塘口長堤記」が収められている（58頁）。

29) 海野一隆『東洋地理学史研究 大陸篇』（清文堂、2004）所収。

30) 『明史』巻七十二、職官志一、兵部

職方掌輿図・軍制・城隍・鎮戍・簡練・征討之事。凡天下地里險易遠近、辺腹疆界、俱有図本、三歳一報、與官軍車騎之数偕上。

31) 『正徳会典』巻17、戸部 民科、州県一、図志一に引用する『諸司職掌』には、

諸司職掌

凡十二部所属布政司府州県、地理人物、図志所載古今沿革、山川險易、戸口賦税多寡之数、俱要周知。

とあり、また、『正徳会典』巻114、兵部 図本には

戸部所掌有図志、而諸辺疆界、各有図本以覽知地形為守禦之計者、則属本部、故列于此。

諸司職掌

凡天下要衝、及險阻去処、各画図本、并軍人版籍、須令所司成造送部、務知險易。

事例

成化元年、令図本戸口文冊、俱限三年一次造報。○弘治元年、定図本及官軍戸口馬騾文冊限期。

などとある。

32) 『中国国家博物館館蔵文物研究叢書』明清檔案卷、清代（上海古籍出版社、2007）

33) 張哲嘉「明代方志の地図」（黃克武主編『画中有話：近代中国的視覚表述与文化構図』中央研究院近代史研究所、2003）

34) 『広輿図』に関しては、海野一隆「『広輿図』の諸版本」『研究集録』（大阪大学教養部14輯、1966）及び海野一隆「廣輿図の資料となった地図類」『研究

- 集録』（大阪大学教養部）15 輯、1967）などを参照。
- 35) 海野一隆「『陝西四鎮図説』所載西域図略について」（海野一隆『東西地図文化交渉史研究』清文堂、2003）。
- 36) 海野一隆「廣輿図の反響—明・清の書籍に見られる廣輿図系の諸図—」（『研究集録』（大阪大学教養部）23 輯、1975）
- 37) 海野一隆「漢民族社会における歴史地図の変遷」（『東洋地理学史研究 大陸篇』清文堂、2004）64 頁。
- 38) 内藤湖南『支那史学史』十一、明代の史学、九、王光魯の沿革地図
- 39) マテオ・リッチの伝えた地図やその系統をひく地図については、海野一隆「明清におけるマテオ・リッチ系世界図」（海野一隆『東西地図文化交渉史研究』清文堂、2003）に詳しい。
- 40) 海野一隆「漢民族の華夷思想と地図」（『東洋学報』79 - 2、1997）
- 41) 船越昭生「在華イエズス会士の地図作成とその影響について」（『東洋史研究』27 - 4、1969）
- 42) 『彙輯輿図備攷全書』凡例、
一、諸刻止有十三省・九辺諸輿図耳。是集則以利西泰之進呈「四大部州輿図」併纏度為首、俾人知九州之外、更有如是之大。
- 43) 海野一隆「正保刊『万国総図』の成立と流布」（同『東西地図文化交渉史研究』365 - 370 頁）、三好唯義編『世界古地図コレクション』（河出書房新社、1999）46 頁、101 頁。
- 44) 『寰宇通衢』は『四庫全書存目叢書』史部第 166 冊に影印されているほか、楊正泰撰『明代驛站考（増訂本）』（上海古籍出版社、2006）に排印されている。
- 45) 当時の『縉紳便覧』については、『明代版刻綜録』に『真楷大字全号縉紳便覧』一卷（万曆十二年刊）が挙げられているほか、筑波大学に万曆 15 年頃刊の『新刊全号宦林備覧』一卷一冊、『新刊大字全号縉紳便覧』一卷一冊が所蔵されている。また、崇禎年間の『分省撫按縉紳便覧』影印が 1980 年に上海古籍書店から出版されている。
- 46) 『大明官制大全』五卷本、重修官制凡例、

一、日本原無郡邑衝僻・錢穀盈縮之目。隆慶元年八月題准新定地里繁簡考、深禪時政、逐款附入、以広伝覽。

47) 『観風便覧』は『両河観風便覧』残三巻と『山東観風便覧』四巻（中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館所蔵）が現存するのみである。『両河観風便覧』については、以前「『両河観風便覧』について」（『汲古』23、1993）や前掲「地理書と政書」で紹介したことがある。

48) 邸報については、尹韻公『中国明代新聞伝播史』（重慶出版社、1990）を参照されたい。史料として明実録や邸報を利用したものに、談遷『国権』がある。王世貞『弇山堂別集』や錢謙益『国初群雄事略』なども明実録を利用したことはよく知られている。

49) 張之洞『書目答問』子部、兵家第三

読史方輿紀要一百三十巻、形勢紀要九巻。〔顧祖禹。通行本。活字版本不善。此書、專為兵事而作、意不在地理考証。〕

〔附記〕

本稿の内容の一部は2007年11月に開催された「全球化下明史研究之新視野」国際学術研討会（於 東呉大学・暨南国際大学）における報告「明末地圖與公牘－地域性政書的出現－」をもとにしたものである。会議の席上では王德毅氏・張英聘氏より貴重なコメントをいただいた。学会への参加を慫慂された中央研究院近代史研究所の巫仁恕氏および明代研究学会の宋恵中氏をはじめとする関係各位に記して深謝したい。

地理學史上之明末

— 從明末衙門編纂的地圖冊看明代地理知識的普及

大澤顯浩

明代後期羅洪先『廣輿圖』的出版對地理學著作起了很大的作用，不過，與作為方格圖的『廣輿圖』有著明顯不同的山水圖方式的地圖也陸續得以製作。這個事實表示了山水圖方式的地圖有其重要的意義。明末由地方衙門編寫的地圖冊有彩色山水圖方式的地圖和圖說，可是現在存世很少。本稿介紹兩種地方衙門編寫的地圖冊『南京府縣地圖冊』和『江西輿地圖說』，而且將提及明代末期的地理知識的普及和它的可能性。

『南京府縣地圖冊』是屬於南直隸的揚州府·淮安府·徐州·鳳陽府·滁州·和州所屬府縣的地圖和圖說，其收藏於鎮江博物館。再者，以江西省全體為對象的『江西輿地圖說』收藏於北京的中國國家圖書館。這些地圖冊都附有彩色山水圖方式的地圖和圖說。

『紀錄彙編』也收錄了趙秉忠的同名地理書『江西輿地圖說』，與中國國家圖書館所藏的『江西輿地圖說』圖說對照，兩者內容大約同一。『紀錄彙編』還錄有跟『江西輿地圖說』同樣內容的王世懋『饒南九三府圖說』。根據他的跋文，可以知道巡按御史使的編寫情形。可以說這些地圖冊都是由地方衙門編寫的。

明代末期陸續出版包含官方的地理知識的地理書，成為了出現各種各樣的地理編著的一個原因，使得接受地理知識的階層底邊擴大。而且有些明末製作的地理書也介紹了耶穌會宣教師導入的新知識。

明代末期，地理知識跟著商業出版發展普及，當時社會有接受新知識的契機，可是終究沒能落實結果。